

On traces of Hecke operators for the case
of weight one

神大 自然 秋山茂樹 (Shigeki Akiyama)

名大 理 谷川好男 (Yoshio Tanigawa)

神大 理 平松豊一 (Toyokazu Hiramatsu)

序. 以下で我々が扱う重さ 1 の保型形式は, 流行していな
い数学の一つである. 流行してゐない数学の多くは, 統一的
な構造がなく, それらに共通な性質が具体的, 経験的, 偶然
的であるが故に正統派の数学者からみれば, '物好きにやっ
てるだけで何にもならない' と見なされるだろう. が, 我々は
既知の法則性の域外にある新しい現象との出会いを期待して,
その具体性の中に踏みこんでいこうと思う.

§ 1. $G = SL_2(\mathbb{R})$, Γ を非一種 Fuchs 群で, $\Gamma \neq \begin{pmatrix} -1 & 0 \\ 0 & 1 \end{pmatrix} (=$
 $-I_2)$ とする. $\tilde{\Gamma} \in \Gamma$ の commensurator in G とし, $\alpha \in \tilde{\Gamma}$ を固
定する. $\Gamma' \in \Gamma$ と α で生成された G の subgr. とし, $\kappa \in \Gamma'$ の
 ν 次ユークリッド表現 ($\nu < \infty$) とする. κ は, $[\Gamma : \Gamma'] < \infty$ とする

ようにとる. ここで, $\Gamma^0 = \Gamma \cap \text{Ker } \chi$. $S_k(\Gamma, \chi)$ と, χ の表現空間に値をとる Γ に関する χ 付き重さ k の *vector valued cusp forms* の作る空間とする. そして, この空間に作用する Hecke 作用素 T , $\Gamma \alpha \Gamma = \bigcup_{\mu=1}^d \alpha_\mu \Gamma$ と右 coset 分解して,

$$T(\Gamma \alpha \Gamma) \cdot F(z) = \sum_{\mu=1}^d \chi(\alpha_\mu) F|[\alpha_\mu^{-1}]_k$$

と定義する. ここで, $\alpha_\mu^{-1} = \begin{pmatrix} a & b \\ c & d \end{pmatrix}$ とするとき, $F|[\alpha_\mu^{-1}]_k = F(\alpha_\mu^{-1} z) (cz+d)^{-k}$ とする. $k=1$ の場合には, この Hecke 作用素の *trace* を計算することは *open problem* であった. 従来の *algebra-geometric* な手法では, $k=1$ に関しては情報が得られな...が, これは *Riemann-Roch type* の定理が $k=1$ と折り返し戻として...ることによる. 我々は, Selberg の *trace formula* を用いるのであるが, $k=1$ はやはり折り返し戻として表れる. 即ち, $k > 1$ の場合には *hyperbolic conjugacy classes* からの寄与が $k \leftrightarrow 2-k$ の対応によって, 消滅するかまたは簡単な数論的量として把握できるのであるが, $k=1$ の場合にはこのようにいかなく, その *trace formula* には Selberg type Zeta 関数の *Residue* が表れる. この Zeta の解析接続は *trace formula* の両辺を解析接続することによって間接的に得られる. この間の事情を以下で説明しよう.

H を複素上半平面とし,

$$\tilde{H} = H \times \mathbb{T}, \quad \tilde{G} = G \times \mathbb{T}, \quad \mathbb{T} = \mathbb{R}/(2\pi)$$

と置く. $\tilde{G} \ni (g, \theta)$ の $\tilde{H} \ni (z, \phi)$ への作用は

$$(g, \theta)(z, \phi) = (gz, \phi + \arg(cz + d) - \theta)$$

とする. $\gamma \in \tilde{G}$ で, $\gamma = \begin{pmatrix} a & b \\ c & d \end{pmatrix}$. この作用は transitive である.

$\Gamma \times \{0\}$ を \tilde{G} に埋めこみ, これを Γ と同一視する. よく知られてゐるように, この空間は weakly symmetric Riemannian space であり, \tilde{G} -不変微分作用素のなす環は

$$\tilde{\Delta} = y^2 \left(\frac{\partial^2}{\partial x^2} + \frac{\partial^2}{\partial y^2} \right) + y \frac{\partial}{\partial x} \frac{\partial}{\partial \phi} + \frac{5}{4} \frac{\partial^2}{\partial \phi^2}, \quad \frac{\partial}{\partial \phi}$$

の 2 つで生成される可換環である. $L^2(\Gamma \backslash \tilde{H}, \chi)$ を通常のように定義し, その部分空間 $L_0^2(\Gamma \backslash \tilde{H}, \chi)$ を Γ° の各 cusp での Fourier-Bessel 展開の定数項の vanishing condition を加えた空間とする. 更に, $L_0^2(\Gamma \backslash \tilde{H}, \chi)$ の部分空間 $\mathcal{M}(k, \lambda)$ を次で定める: $\mathcal{M}(k, \lambda) \ni F(z, \phi)$ であること

$$F(z, \phi) \in L_0^2(\Gamma \backslash \tilde{H}, \chi), \quad \tilde{\Delta} F = \lambda F, \quad \frac{\partial}{\partial \phi} F = -k F$$

とする. この空間は Selberg eigenspace と呼ばれ, 次の基本的レシマが成立する.

$$\begin{array}{ccc} \text{レシマ. } \mathcal{M}(k, -k(k+\frac{1}{2})) & \xrightarrow{\sim} & S_k(\Gamma, \chi) \\ \cup & & \cup \\ F(z, \phi) & \longrightarrow & F(z) \end{array}$$

ここで, $F(z, \phi) = \exp(-\sqrt{-1}k\phi) y^{\frac{k}{2}} F(z)$ とする.

この同型に従って, $S_k(\Gamma, \chi)$ での Hecke 作用素 $T(\Gamma \times \Gamma)$ の action を $\mathcal{M}(k, -k(k+1))$ 上に書きかえて

$$T(\Gamma \times \Gamma) F(z, \phi) = \sum_{\mu=1}^d \chi(\alpha_\mu) F(\alpha_\mu^{-1}(z, \phi)).$$

このようにして, Hecke 作用素の trace を $\mathcal{M}(k, \lambda)$ 達の上の trace の '和' の中の一つとして捉えるのが Selberg の手法である. ここで我々は, point-pair invariant kernel として

$$k_s(z, \phi; z', \phi') = \exp(-\sqrt{-1}(\phi - \phi')) \frac{(yy')^{\frac{1}{2}}}{(z - \bar{z}')/2\sqrt{-1}} \left| \frac{(yy')^{\frac{1}{2}}}{(z - \bar{z}')/2\sqrt{-1}} \right|^s$$

を用いる ($s \in \mathbb{C}$). この kernel k_s は, $\operatorname{Re} s > 1$ で Selberg の 2) (a) - (b) type となり, $\exp(-\sqrt{-1}(\phi - \phi'))$ という形からこの kernel による operator の $\mathcal{M}(k, \lambda)$ 上への作用は, $k=1$ 以外では vanish する. また, この kernel の定義する積分作用素の $\mathcal{M}(1, \lambda)$ の元に対応する固有値は λ のみに depend し, 次で与えられる:

$$h_s(x) = h_s(1, \lambda) = 2^{2+s} \pi B\left(\frac{1}{2}, \frac{s+1}{2}\right) B\left(\frac{s}{2} + \sqrt{-1}x, \frac{s}{2} - \sqrt{-1}x\right).$$

ここで, $\lambda = -\frac{3}{2} - x^2$. $k \neq 0$ なる Γ exceptional な eigenvalue λ は存在しない ($x \in \mathbb{R}$).

$$-\frac{3}{2} = \lambda_0 > \lambda_1 > \dots > \lambda_n > \dots$$

と λ を numbering しておく. まず, Γ が cocompact のときは, Selberg trace formula は次のようになる:

$$K_s(z, \phi; z', \phi') = \sum_{g \in \Gamma \backslash \Gamma} \lambda(g) k_s(z, \phi; g(z', \phi'))$$

とおくとき, $t_\lambda \in \mathcal{T}(\Gamma \backslash \Gamma)$ の $\mathcal{M}(1, \lambda)$ 上の trace として,

$$\sum_{\lambda=0}^{\infty} h_s(1, \lambda_\lambda) t_\lambda = t_\lambda \int_{\Gamma \backslash \tilde{H}} K_s(z, \phi; z, \phi) d(z, \phi).$$

Γ に *cusps* があるときには, 上式右辺は発散してしまう. そのときには, $K_s^* = K_s - H_s$ と云う修正が必要である. $k=1$ の場合の問題点の一つは, H_s の定義即ち Eisenstein series の定義にある. 以下の §2-3 でそれらと手え, K_s, H_s のそれぞれの発散項がうち消し合うことを示す. H_s はその形から discrete スペクトルには影響を与えないことがわかり, 修正した形の Selberg trace formula が成立することになる.

§2. Eisenstein series

$$K_1, \dots, K_h; K_{h+1}, \dots, K_{h+h'}$$

Γ の regular cusps と irregular cusps それぞれの Γ -ineq. な類の代表とする.

$$\Gamma_i = \{ \sigma \in \Gamma : \sigma K_i = K_i \};$$

$$\Gamma_\infty = \langle \begin{pmatrix} 1 & 1 \\ 0 & 1 \end{pmatrix} \rangle, \quad \Gamma'_\infty = \langle -\begin{pmatrix} 1 & 1 \\ 0 & 1 \end{pmatrix} \rangle$$

とし, $\sigma_i \in G$ を次のようにとる: $\sigma_i \infty = K_i$ such that

$$\sigma_i^{-1} \Gamma_i \sigma_i = \begin{cases} \Gamma_\infty, & 1 \leq i \leq h \\ \Gamma'_\infty, & h+1 \leq i \leq h+h'. \end{cases}$$

そして, K_i に付随し E_i : Eisenstein series を次で定義する.

$$\begin{aligned} E_i(z, \phi; \delta) &= \sum_{\sigma \in \Gamma_i \setminus \Gamma} \text{Im}(\sigma_i^{-1} \sigma z)^\delta \exp(-\sqrt{-1} \sigma_i^{-1} \sigma \phi) \chi(\sigma)^{-1} P_i \\ &= \sum_{\sigma \in \Gamma_i \setminus \Gamma} \frac{y^\delta}{|cz+d|^{2\delta}} \exp(-\sqrt{-1}(\phi + \arg(cz+d))) \chi(\sigma)^{-1} P_i. \\ \sigma_i^{-1} \sigma &= \begin{pmatrix} * & * \\ c & d \end{pmatrix} \end{aligned}$$

ここで, $r_i = [\Gamma_i : \Gamma_i^0]$, $\Gamma_i^0 = \Gamma_i \cap \text{Ker } \chi$, $\Gamma_i = \langle \gamma_i \rangle$ とするとき,

$$P_i = \begin{cases} \frac{1}{r_i} \sum_{\gamma \in \Gamma_i \setminus \Gamma_i^0} \chi(\gamma) & , 1 \leq i \leq h \\ \frac{1}{2r_i} \sum_{l=1}^{2r_i} (-1)^l \chi(\gamma_i^l) & , h+1 \leq i \leq h+h' \end{cases}$$

P_i は中等的な Hermite 行列で, $\det P_i \neq 0$ ならば, P_i は単位行列になる. K_i が *irregular* なとき, P_i は r_i が奇数ならば *vanish* する. 特に, χ が *trivial* ならば $r_i = 1$ である. また, χ が 1 次元表現のときは, $r_i \neq 2$ ならば P_i は *vanish* する. これらのことは, *irregular cusps* が計算をすすめる上で多くの場合に不要であることを示している.

この Eisenstein series の全平面への解析接続は, Laplacian Δ に関する固有関数の内積公式とこの場合につくり, それとこの Eisenstein series に適用し Maass - Selberg の関係式を導くことにより行える. これらの方法は, 久保田 [2] で展開されているものと同じである. この Eisenstein series を cusp で Fourier - Bessel 展開したときの constant term は上の手法の中で重要な役割を演ずる. regular cusp K_i に付随した E_i の regular cusp K_i での F.-B. 展開の constant term は次の通りである:

$$\exp(-\sqrt{t}\phi) \left\{ \delta_{ij} P_i y^\delta - \sqrt{t} B(\delta, \frac{1}{2}) g_{ij}^0(\delta) y^{1-\delta} \right\};$$

$$\text{ここで, } g_{ij}^0(\delta) = \sum_{\substack{\tau \in \Gamma_\infty \setminus \sigma_i \Gamma \sigma_j^{-1} / \Gamma_\infty \\ \tau = \begin{pmatrix} * & * \\ c & d \end{pmatrix}, c \neq 0}} \frac{\text{sgn } c}{|c|^{2\delta}} P_j \chi(\sigma_i \tau \sigma_j^{-1})^{-2} P_i.$$

irregular cusp の場合に変更すべき量は, $g_{ij}^0(\delta)$ の和の条件 $\tau \in \Gamma_\infty \setminus \sigma_i \Gamma \sigma_j^{-1} / \Gamma_\infty$ において, $\Gamma_\infty \ni \Gamma_\infty'$ におき変えればよい.

N.B. 1. λ が trivial なときは,

$$P_i = \begin{cases} 1_\nu, & 1 \leq i \leq h \\ 0_\nu, & h+1 \leq i \leq h+h'. \end{cases}$$

このとき, constant term matrix $M = (g_{ij}(\delta))$, $g_{ij}(\delta) = -\sqrt{-1}$

$\times B(\delta, \frac{1}{2}) g_{ij}^0(\delta)$ は τ のとり方を $\tau \rightarrow \tau^{-1}$ とすると

$$M = \left(\begin{array}{c|c} \begin{matrix} 0 & A \\ -A & 0 \end{matrix} & \begin{matrix} 0 \\ 0 \end{matrix} \\ \hline \begin{matrix} 0 \\ 0 \end{matrix} & \begin{matrix} 0 \\ 0 \end{matrix} \end{array} \right),$$

即ち, M は交代である. また, Maass-Selberg relation は,

M を $\text{Re } \delta = \frac{1}{2}$ の軸まで解析接続するならば M の左上の部分 h は unitary 行列になることを教える. このことは, h が偶数であることを意味する.

次に, H_s の定義を行う:

$$H_s(z, \phi; z', \phi') = \frac{1}{8\pi^2} \sum_{i=1}^{h+h'} \sum_{\mu=1}^d \chi(\alpha_\mu) \int_{-\infty}^{\infty} h_s(x) E_i(\alpha_\mu^{-1}(z, \phi); \delta) \overline{E_i(z', \phi'; \delta)} dx.$$

ここで, $\delta = \frac{1}{2} + \sqrt{-1}x$, $\lambda = \delta(\delta-1) - \frac{5}{4}$ とする. $K_s^* = K_s - H_s$ と

おくと, この K_s^* が compact operator となることは §3 で示す.

とりあえずこの英を仮定しておけば,

$$(1) \quad \sum_{\ell=0}^{\infty} h_s(\ell, \lambda) t_\ell = t_\ell \int_{\Gamma \backslash \mathbb{H}} K_s^*(z, \phi; z, \phi) d(z, \phi)$$

という修正された Selberg trace formula が成立する。我々の目標は t_0 であるが、これを求めるには次のことに注意すればよい：

$$\begin{cases} l \neq 0 \text{ のとき, } h_0(1, \lambda_l) = 0, \\ l = 0 \text{ のとき, } \lim_{s \rightarrow +0} s h_s(1, \lambda_0) = 12\pi^2. \end{cases}$$

即ち、 $l=0$ のときのみ $h_s(1, \lambda_l)$ は $s=0$ で pole をもつので、 $s=0$ の Residue を考えればよい。ここで大切なことは、(1) 式で、 h_s が $\text{Re } s > 1$ で (a)-(b) type であるのでその左辺が収束し意味をもつのだが、その両辺を解析接続することによって $s=0$ の意味を考えねばならないことである。

§ 3. K_s^* の compact 性

次に、 K_s^* の compact 性について説明しよう。 $H_s(z, \phi; z', \phi')$ が non-bounded となるのは、 z, z' が同時に Γ の同じ cusp に接近するときしかあり得ない。このときの発散項は、1 つの cusp K_i に対して

$$(2) \quad \frac{1}{8\pi^2} \sum_{\alpha_\mu K_i = K_i} \chi(\alpha_\mu) \int_{-\infty}^{\infty} h_s(r) \sum_{j=1}^{k+l'} (E_j \text{ の const. term}) (\bar{E}_j \text{ の const. term}) dr$$

で与えられる。ここで、和 $\alpha_\mu K_i = K_i$ の意味は $\alpha_\mu \Gamma$ の元で K_i を fix するような元があるときには、coset 分解 $\Gamma \backslash \Gamma = \bigcup_{\mu=1}^d \alpha_\mu \Gamma$ の代表元とはじめから K_i を fix する元にとりかえておくという準

備の下で, K_i を fix する代表元をとると云うことである.

$$R(i, \mu) = \phi - \phi' + \arg(j(\sigma_i^{-1} \alpha_\mu^{-1}, z)) - \arg(j(\sigma_i^{-1}, z))$$

と置く. ここで, $j(\sigma, z) = (cz+d)$, $\sigma = \begin{pmatrix} a & c \\ c & d \end{pmatrix}$ とする. そのとき,

(2) は次のように書ける:

$$\begin{aligned} & \frac{1}{8\pi^2} \sum_{\substack{\alpha_\mu \\ \mu K_i = K_i}} \int_{-\infty}^{\infty} h_s(n) \left\{ \exp(-\sqrt{t} R(i, \mu)) \left[\operatorname{Im}(\sigma_i^{-1} \alpha_\mu^{-1} z)^\delta P_i + \operatorname{Im}(\sigma_i^{-1} \alpha_\mu^{-1} z)^{1-\delta} \varphi_{ii}(\delta) \right] \right. \\ & \quad \times \left. \left[\operatorname{Im}(\sigma_i^{-1} z')^\delta P_i + \operatorname{Im}(\sigma_i^{-1} z')^{1-\delta} \overline{\varphi_{ii}(\delta)} \right] \right. \\ & \quad \left. + \sum_{j \neq i} \exp(-\sqrt{t} R(i, \mu)) \operatorname{Im}(\sigma_i^{-1} \alpha_\mu^{-1} z) \varphi_{ji}(\delta) \operatorname{Im}(\sigma_i^{-1} z') \overline{\varphi_{ji}(\delta)} \right\} dt. \end{aligned}$$

ここで, $\operatorname{Re} \delta = \frac{1}{2}$ と Riemann-Lebesgue の定理より, この式の

発散する部分は次のようになる.

$$\begin{aligned} & \frac{1}{2\pi} \sum_{\substack{\alpha_\mu \\ \mu K_i = K_i}} P_i \exp(-\sqrt{t} R(i, \mu)) \left\{ \operatorname{Im}(\sigma_i^{-1} \alpha_\mu^{-1} z) \operatorname{Im}(\sigma_i^{-1} z) \right\}^{\frac{1}{2}} \\ & \quad \times \varphi_s(\log(\operatorname{Im}(\sigma_i^{-1} \alpha_\mu^{-1} z)) - \log(\operatorname{Im}(\sigma_i^{-1} z))). \end{aligned}$$

ここで,

$$\varphi_s(n) = \frac{1}{2\pi} \int_{-\infty}^{\infty} \exp(-\sqrt{t} n) h_s(n) dt$$

とする. 一方, K_s の方の発散項については容易な議論で,

cuspidal K_i に z, z' を近づけるときの主要項は次のようになる:

$$\sum_{\substack{\alpha_\mu \\ \mu K_i = K_i}} \sum_{\gamma \in \Gamma_i} k_s(z, \phi; \alpha_\mu \gamma(z', \phi')) \chi(\alpha_\mu \gamma).$$

k_s が具体的に与えられているので, この項を漸近的に評価

することができる. regular, irregular とほぼ同じ故, こ

こでは irregular cusp の場合のみについて述べよう. $z_1,$

z'_1 と共に ∞ に近づけるとき,

$$\sigma_i(z_i, \phi_i) = (z_i, \phi_i), \quad \sigma_i(z_i', \phi_i') = (z_i', \phi_i').$$

$$z_i = x_i + y_i \sqrt{-1}, \quad z_i' = x_i' + y_i' \sqrt{-1} \quad \text{と書くととき,}$$

$$\begin{aligned} & \sum_{g \in \Gamma_i} k_s(\sigma_i(z_i, \phi_i), \alpha_\mu g \sigma_i(z_i', \phi_i')) \chi(g) \\ &= \sum_{l \in \mathbb{Z}} \exp(-\sqrt{-1}(\phi_i - \phi_i' + \delta_l)) \frac{(y_i, y_i')^{\frac{1}{2}}}{(z_i - \bar{z}_i' - l)/2i} \left| \frac{(y_i, y_i')^{\frac{1}{2}}}{(z_i - \bar{z}_i' - l)/2i} \right|^s \chi(\eta_i^l) \\ &= \exp(-\sqrt{-1}(\phi_i - \phi_i')) 2^{s+1} \sqrt{-1} (y_i, y_i')^{\frac{s+1}{2}} \sum_{l=0}^{r_i-1} \sum_{l \in \mathbb{Z}} (-1)^{lx_i+l} (z_i - \bar{z}_i' - lx_i - l)^{-1} \\ & \quad \times |z_i - \bar{z}_i' - lx_i - l|^{-s} \chi(\eta_i^l). \quad (3) \end{aligned}$$

ここで, δ_l は l が odd なとき π , l : even なとき 0 とする. 従って, 次の和が問題となる:

$$\sum_{l \in \mathbb{Z}} (-1)^{lx_i} (z_i - \bar{z}_i' - lx_i - l)^{-1} |z_i - \bar{z}_i' - lx_i - l|^{-s}.$$

容易にわかるように, この和は $r_i = \text{odd}$ のとき $O((y_i + y_i')^{-s-1})$

となる. 従ってこのときは, (3) で $y_i, y_i' \rightarrow \infty$ とするとき K_s

は有界である. 従って, $r_i = \text{even}$ のときのみ発散する. そのとき,

$$\begin{aligned} \sum_{l \in \mathbb{Z}} (A - lx_i)^{-1} |A - lx_i|^{-s} &\sim \int_{-\infty}^{\infty} \frac{\bar{A} - r_i x}{|A - r_i x|^{s+2}} dx \\ &= -\frac{\sqrt{-1}}{r_i \text{Im} A^s} B\left(\frac{s+1}{2}, \frac{1}{2}\right) \end{aligned}$$

に注意して変形すれば, 発散項は

$$\frac{1}{2\pi} \exp(-\sqrt{-1}R(i, \mu)) (\text{Im}(\sigma_i^{-1} \alpha_\mu^{-1} z)) \text{Im}(\sigma_i^{-1} z))^{\frac{1}{2}} P_i g_s(\log(\text{Im}(\sigma_i^{-1} \alpha_\mu^{-1} z)) - \log(\text{Im}(\sigma_i^{-1} z)))$$

となり, 全体として H_s の発散項と一致する. $r_i = \text{odd}$ の場合

には, $P_i = 0_v$ であつたからこれで済む. 発散項はうち消し

合っていることがわかる。以上で、 $K_s^* = K_s - H_s$ が bounded operator であることが云えた。これを $L_0^2(\Gamma \backslash \tilde{H}, \chi)$ 上に制限し T : operator として、 K_s^* は compact operator になる。 $\tilde{\Delta}$ の self adjoint 性から、 $F(z, \phi) \in L_0^2(\Gamma \backslash \tilde{H}, \chi)$ に対しては

$$\int_{\Gamma \backslash \tilde{H}} H_s(z, \phi; z', \phi') F(z', \phi') d(z', \phi') = 0$$

が従うので、 H_s は discrete spectra には影響を及ぼさない。これで、(1) の成り立つことが保証された。

§ 4. $[g] \ni g \in \Gamma \times \Gamma$ の Γ による共役類とし、

$$\Gamma(g) = \{ \gamma \in \Gamma : g = \gamma g \gamma^{-1} \},$$

$$H^* = H - \bigcup_{i=1}^{h+h'} \bigcup_{\sigma \in \Gamma} \sigma V_i, \quad \sigma_i^{-1} V_i = \{ z \in H : \text{Im } z > Y \}$$

とおく。そのとき、

$$t_r \int_{\Gamma \backslash \tilde{H}^*} K_s(z, \phi; z, \phi) d(z, \phi) = \sum_{[g], g \in \Gamma \times \Gamma} 2\pi t_r \chi(g) \int_{\Gamma(g) \backslash H^*} k_s(z, 0; g(z, 0)) dz.$$

$r: \tau$.

$$I^*(g, s) = \int_{\Gamma(g) \backslash H^*} k_s(z, 0; g(z, 0)) dz$$

とおく。特に、cusp の近傍を切り落とさなくても収束する場合があるので、

$$I(g, s) = \int_{\Gamma(g) \backslash H} k_s(z, 0; g(z, 0)) dz$$

とも書く。

(i) 単位類. $g = 1$.

$$I(g) = \text{vol}(\Gamma \backslash H).$$

(ii) 楕円類. $g = \begin{pmatrix} a & c \\ c & d \end{pmatrix}$ の H 内の fixed pt. $\varepsilon \notin \Gamma$, $c\varepsilon + d = \bar{\varepsilon}$ とおく. そのとき,

$$I(g, s) = \frac{4\bar{\varepsilon}}{\#\Gamma(g)} \int_0^1 \int_0^{2\pi} \frac{r(1-r^2)^{s-1}}{(1-\bar{\varepsilon}^2 r^2) |1-\bar{\varepsilon}^2 r^2|^s} dr d\theta.$$

Lebesgue の有界収束定理より,

$$\lim_{s \rightarrow +0} s I(g, s) = \frac{4}{\#\Gamma(g) \cdot (s - \bar{\varepsilon})}.$$

(iii) 双曲類で, Γ の双曲英を fix する場合. よく知られているように, g が双曲型で固定英が cusp でなければ Γ 双曲英であり, 一方が双曲英ならばもう一方もそうである. 逆に, 一方が cusp ならばもう一方も cusp である. $\lambda \in g$ の eigenvalue とし, $\lambda_0 \in \Gamma(g)$ の生成元の eigenvalue で $|\lambda_0| > 1$ なものとするとき,

$$I(g, s) = \frac{2^{s+2} \log |\lambda_0| \operatorname{sgn} \lambda B\left(\frac{s+1}{2}, \frac{1}{2}\right)}{|\lambda + \lambda^{-2}|^s |\lambda - \lambda^{-2}|}.$$

(iv) 双曲類で, Γ の cusp を fix する場合. この場合の寄手は, $s=0$ での Residue を考える際には vanish するのだが, Residue をとる前に興味深い項が表れる. そこでここでは, s をかけずに $s \rightarrow 0$ に近づけた形で寄手を書いてみよう. $\lambda \in g$ の eigenvalue とすると,

$$\begin{aligned} & \lim_{s \rightarrow 0} \lim_{Y \rightarrow 0} \left\{ I^*(g, s) - \frac{\lambda \bar{\varepsilon} (2 \log |\lambda|)}{\pi |1 - \lambda^2|} \log Y \right\} \\ &= \frac{4\pi\lambda}{|1 - \lambda^2|} \log \left\{ \frac{2c(g) \max(|\lambda|, |\lambda|^{-2})}{|\lambda - \lambda^{-2}|} \right\}. \end{aligned}$$

ここで, $c(g)$ は次のように決まる. g の固定する cusps を K_A, K_B とすると, $\bar{\varepsilon}$ で述べたように Γ -ineq. な cusps の代表系

と $\sigma_i \in G$ を固定したとき,

$$K_A = \tau_A K_i, \quad K_B = \tau_B K_j \quad (\tau_A, \tau_B \in \Gamma)$$

とかける. $\varphi: \mathbb{T}^2 \rightarrow G$ を次のようにえらぶ:

$$\varphi \tau_A \sigma_i = \begin{pmatrix} 1 & * \\ 0 & * \end{pmatrix}, \quad \varphi \tau_B \sigma_j = \begin{pmatrix} 0 & * \\ c & * \end{pmatrix}.$$

このとき, $c(g) = |c|$ である. $c(g)$ は K_A, K_B の順序や τ_A, τ_B, φ のとり方によらずに, 一意に決まる. 更に, $\gamma \in \Gamma$ ならば, $c(\gamma g \gamma^{-1}) = c(g)$ も成立する.

N.B. 1. Γ_1, Γ_2 を 2 つの異なる種 Fuchs 群で, 抽象群として同型とする. そのとき, 対応する $c(g_1)$ と $c(g_2)$ は必ずしも同じ値とは限らなく, $(1, \lambda)$ 型の eigenvalue の分布には異なる可能性があることと上式は示している (Teichmüller 的ならずれが trace formula に影響を与える可能性).

(V) 放物類.

$$B_i = \{g \in \Gamma \backslash \Gamma : g K_i = K_i, g: \text{parabolic on } I_2\},$$

$$B_i \ni g = \sigma_i s(g) \begin{pmatrix} 1 & \mu(g) \\ 0 & 1 \end{pmatrix} \sigma_i^{-1}, \quad s(g) = \pm 1$$

とあく. K_i が "regular cusp" のときは,

$$\lim_{s \rightarrow +0} \lim_{Y \rightarrow 0} s \left\{ \sum_{g \in B_i} 2\pi \operatorname{tr} \chi(g) I^*(g, s) - \sum_{\alpha \mu K_i = K_i} g_s(0) s(\alpha \mu) \log Y + \operatorname{tr}(\chi(\alpha \mu) P_i) \right\}$$

$$= -\frac{4\pi^2 \sqrt{-1}}{x_i} \sum_{\substack{\{g\} \in B_i / \Gamma_i^0 \\ \{g\} \neq \Gamma_i^0}} s(g) \operatorname{tr} \chi(g) \operatorname{cat} \left(\frac{\pi \mu(g)}{x_i} \right).$$

ここで, $\{g\}$ は B_i / Γ_i^0 の cuset $g \Gamma_i^0$ を表している. 次に, K_i が irregular cusp とあるとき, Γ_i^0 の位数 2 , subgr. $(\Gamma_i^0)^2$ を

とる。

$$\lim_{s \rightarrow +0} \lim_{Y \rightarrow \infty} s \left\{ \sum_{g \in B_i} 2\pi \operatorname{tr} \chi(g) I^*(g, s) - \sum_{\alpha_\mu k_i = K_i} g_s(0) s(\alpha_\mu) \log Y \operatorname{tr} (\chi(\alpha_\mu) P_i) \right\}$$

$$= -\frac{4\pi^2 \sqrt{-1}}{2\chi_i} \sum_{\substack{\{g\} \in B_i / (\Gamma_i^0)^2 \\ \{g\} \neq (\Gamma_i^0)^2}} s(g) \operatorname{tr} \chi(g) \operatorname{cat} \left(\frac{\pi \mu(g)}{\chi_i} \right).$$

計算は、Euler-Maclaurin の総和法を用いる。

§ 5. Trace of H_s

$$F_i(z, \phi; \delta) = \sum_{\mu=1}^d \chi(\alpha_\mu) E_i(\alpha_\mu^{-1}(z, \phi); \delta)$$

とおくとき、この関数は $z \rightarrow z + 2\chi_i \tau$ で不変故、F.-B. 展開されその定数項は次で与えられる：

$$\exp(-\sqrt{-1}\phi) \left\{ y^\delta \sum_{\alpha_\mu k_i = K_i} \frac{\operatorname{sgn} d_\mu}{|d_\mu|^{2\delta}} \chi(\alpha_\mu) P_i + y^{1-\delta} g_{ii}^*(\delta) \right\}.$$

ここで、 $\sigma_i^{-1} \alpha_\mu^{-1} \sigma_i = \begin{pmatrix} * & * \\ 0 & d_\mu \end{pmatrix}$ であり、

$$g_{ii}^*(\delta) = -\sqrt{-1} B(\delta, \frac{1}{2}) \sum_{\substack{\{\sigma\} \in \Gamma_\infty \setminus \sigma_i^{-1} \Gamma \alpha^{-1} \Gamma \sigma_i / \Gamma_\infty \\ \sigma = \begin{pmatrix} * & * \\ c & d \end{pmatrix}}} \frac{\operatorname{sgn} c}{|c|^{2\delta}} P_i \chi(\sigma_i \sigma \sigma_i^{-1})^{-1} P_i.$$

ただし、 K_i が irregular のときは g_{ii}^* の定義 $\Gamma_\infty = \Gamma_\infty \tau$ とり変える。そこで、trace を計算して

$$\lim_{s \rightarrow +0} \lim_{Y \rightarrow \infty} s \left\{ (\text{trace of } H_s) - \sum_{i=1}^{h+h'} \sum_{\alpha_\mu k_i = K_i} g_s(z \log |d_\mu|) \frac{\operatorname{sgn} d_\mu}{|d_\mu|} \log Y \operatorname{tr} (\chi(\alpha_\mu) P_i) \right\}$$

$$= 4\pi^2 \sum_{i=1}^{h+h'} \operatorname{tr} (g_{ii}^*(\frac{1}{2})).$$

ここで、 $g_{ii}^*(\delta)$ についての式では $\operatorname{Re} \delta > 1$ での Y 束しか云えないが、Eisenstein series 自体が全平面に解析接続されるので、

$\varphi_{ii}^*(s)$ も解析接続され, Γ が数論的 なときは Eisenstein series の constant term matrix は L 関数を用いて表されるので, これを利用して $\varphi_{ii}^*(\frac{1}{2})$ の値を具体的に計算するのも可能である. H_s の trace から, $\log \zeta$ のかわりに発散項と orbital integral からの発散項が丁度うち消し合っていることを言うには, 特に hyperbolic で cusp を fix する場合には少し細かい分類が必要であるが, ここでは省略する.

§ 6. 以上より, 次の結果を得る.

定理.

$$\mathrm{tr}(T(\Gamma \times \Gamma)) = \frac{1}{2} \sum_{[\mathfrak{g}] \in S_1} \frac{\mathrm{tr} \chi(\mathfrak{g})}{\#\Gamma(\mathfrak{g}) \cdot (s - \bar{s})} + \frac{1}{2} \mathrm{Res}_{s=0} \zeta^*(s)$$

$$- \sum_{i=1}^{k+k'} \left\{ \frac{\sqrt{-1}}{8x_i} \sum_{\substack{\{\mathfrak{g}\} \in B_i / (\Gamma^0)^2 \\ \{\mathfrak{g}\} \neq (\Gamma^0)^2}} s(\mathfrak{g}) \mathrm{tr} \chi(\mathfrak{g}) \cot \frac{\pi \mu(\mathfrak{g})}{2x_i} \right\} - \frac{1}{4} \sum_{i=1}^{k+k'} \mathrm{tr} \varphi_{ii}^*\left(\frac{1}{2}\right).$$

ここで,

$$\zeta^*(s) = \sum_{[\mathfrak{g}] \in S_2} \frac{\mathrm{sgn} \lambda \log |\lambda_0| \mathrm{tr} \chi(\mathfrak{g})}{|\lambda + \lambda^{-1}|^s |\lambda - \lambda^{-1}|};$$

S_1 は $\Gamma \times \Gamma$ の Γ による elliptic conjugacy classes, S_2 は $\Gamma \times \Gamma$ の Γ による hyperbolic conjugacy classes で Γ の hyperbolic point を fix するものについての和を表す.

N.B. 3. $\zeta^*(s)$ は, $\mathrm{Res} s > 1$ では一般論から絶対収束する. 更に, 全平面への解析接続はこの trace formula によって

なされる。従って、 $t_1(T(\Gamma \times \Gamma))$ の具体的な値を手にするには、 $\zeta^*(s)$ の別な面からの解析接続が必要となる。

N.B. 4. χ が real な表現のときは、楕円類、放物類の寄手は純虚数であり、消滅する。従って、 ζ_{ii}^* のみが残る。

$$\text{Car. 1. } \Phi: \begin{pmatrix} a & b \\ c & d \end{pmatrix} \longrightarrow \begin{pmatrix} a & -b \\ -c & d \end{pmatrix}$$

と云う $\begin{pmatrix} -1 & 0 \\ 0 & 1 \end{pmatrix}$ による conjugation により、 $\Phi(\Gamma) = \Gamma$, $\chi \cdot \Phi = \bar{\chi}$,
 α : diagonal で、 Γ -ineq. cusps の集合が $\{0, \infty\}$ に含まれるとする。そのとき、

$$t_1(T(\Gamma \times \Gamma)) = \frac{1}{2} \text{Res}_{s=0} \zeta^*(s).$$

Car. 2. χ が 1 次の表現で、 $\chi^2 = \text{id.}$ のとき、

$$d_1 = \dim S_2(\Gamma, \chi) = \frac{1}{2} \text{Res}_{s=0} \zeta^*(s).$$

Car. 3. χ が 2 次のとき

$$d_1 = \frac{1}{2} \text{Res}_{s=0} \zeta^*(s) - \frac{1}{4} \sum_{i=1}^{l+l'} t_1 \zeta_{ii}^*\left(\frac{1}{2}\right).$$

我々は、 $\Gamma \ni -1_2$ と仮定して話をすすめてきた。 $\Gamma \ni -1_2$ で $\chi(-1_2) = -1_2$ の場合にも全く同様に出来、regular, irregular の区別はなくなり、parabolic から、寄手は

$$-\sum_{i=1}^l \left\{ \frac{\sqrt{-1}}{4x_i} \sum_{\{g\} \in B_i / \Gamma_i^0} t_1 \chi(g) \cot \frac{\pi \mu(g)}{x_i} \right\}$$

$\{g\} \neq \Gamma_i^0$

となる。ここで、 $\sigma_i^{-1} g \sigma_i = \pm \begin{pmatrix} 1 & \mu(g) \\ 0 & 1 \end{pmatrix}$. B_i の定義も parallel である。更に、上記の Car. 達は、 $\Gamma \ni -1_2$ で χ : odd の場合にも同様に成立する。特に、 $\Gamma = \Gamma_0(p)$ (p : prime), $\chi(g) = \chi(d)$

$(g = \begin{pmatrix} a & c \\ c & a \end{pmatrix})$, χ Dirichlet 指標の場合に上記 Cor. 1 に含まれている。

Problem. Zeta 関数 $\zeta^*(s)$ に関数方程式がもしあれば、それを決定せよ。

References

- [1] S. Akiyama, T. Hiramatsu and Y. Tanigawa, On traces of Hecke operators on the space of cusp forms of weight 1, preprint.
- [2] T. Kubota, Elementary theory of Eisenstein series, Tokyo - New York: Kodansha and Halsted, 1973.